『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章、34章和訳

引　田　弘　道
大　羽　恵　美

カリヤーナカーリン（善行太子）の物語
—『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章—

解　　説

この物語における先行研究としては、中村［2008: 153-181］[1] の第8章「大施太子本生譚の誕生」があげられる。中村は『三宝絵』の大施太子本生譚を研究し、これは「普施商主型」の本生譚と「善友太子型」本生譚の融合によって誕生したとする[2]。

今回『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』（＝BAK）に見られるカリヤーナカーリンの物語のあらすじを示すと以下のようになる。括弧内は偈の番号を表す。

① 序の格言。善人は太陽、悪人は暗闇。（1）
② 二人の王子。プランダラ王に二人の王子あり。美徳あるカリヤーナカーリン王子と美徳のないアカリヤーナ王子。（2-4）
③ 布施を喜ぶカリヤーナカーリン王子。（5）
④ プンヤセーナ王、手紙を使者に託し、娘マノーラマーを与える約束をする。（6）
⑤ カリヤーナカーリン王子、結婚式の前に大海を横切って宝の島に行き、宝石を探す決心を王に打ち明ける。（7-11）
⑥ 宝石の入手と船の難破。弟は兄の喉につかまる。（12-17）
⑦ 兄が眠っているとき、弟は兄の目をくりぬいて彼の宝石を奪う。（18-22）

---

1 『三宝絵本生譚の原型と展開』汲古書院、2008年
2 中村［2008: 153］

⑧　牛飼いが盲目の彼を保護する。王子は気晴らしに琵琶を演奏する。(23-26)
⑨　牛飼いの妻が王子に淫欲を催し、誘惑する。(27-34)
⑩　王子の拒否と牛飼いの妻の讒言。(35-44)
⑪　牛飼いは妻の讒言を信じて王子を追放する。(45-47)
⑫　カリヤーナカーリンは隊商に助けられ、プンヤセーナ王の都に到着する。(48-49)
⑬　マノーラマーによる婿選び。(50-55)
⑭　王子の拒否。(56-59)
⑮　王女による真実語。(60-63)
⑯　王子による真実語。(64-68)
⑰　過去世と現世の結合。(69)
⑱　比丘たちの驚き。(70)

中村［2008: 153-181］によると、本物語に関する内容を伝える文献は以下の通りである。括弧内は略語を示す。

1. *The Gilgit Manuscript of the Saṅgabhedavastu* , part 2, ed. by Raniero Gnoli, Roma, 1978, pp. 110-115. (＝S)
2.『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(大正24、178c-180a)（＝根）
3.『四分律』(大正22、910c-913b)（＝四）
4.『賢愚経』(大正4、410a-415b)（北京版第40巻98頁 fol.5*l*.1-102頁 fol.3*l*.2)（＝賢）
5.『大方便報恩経』「悪友品」(大正3、142b-147a)（＝大）

これらの文献のうち、一番BAKに一番近しいものは『根本説一切有部毘奈耶破僧事』である。これは *The Gilgit Manuscript of the Saṅgabhedavastu* の訳とも考えられるが、細部でよりBAKに近い。他方『四分律』、『賢愚経』、『大方便報恩経』の3経は、二人の兄弟、宝石を求めての出航、弟による兄の眼の傷害、兄の琵琶の演奏、王女による兄の見初め、王女や兄の真実語のモチーフは認められるものの、牛飼いの妻による兄への誘惑と讒訴は先に挙げた2経のみである。その意味でBAKは説一切有部に近い、もしくは有部そのものの作品とみなすことが出来よう。

今回も、サンスクリット原典の読みに関しては引田が、チベット訳と絵図の解説については大羽が行った。チベット語原典に関しては、西蔵大蔵経デルゲ版（台北版）と北京版を参照した。デルゲ版は、サンスクリット語のチベット語音写も含んでいる。両テキストの異同については、サンスクリット語訳と大きく異なる時のみ注に付した。また、BAKの物語として最も普及しているBAK散文抄訳（チベット語）も参照した[3]。

---

[3] *rTogs brjod dpag bsam 'khri shing gi snyan tshig gi rgyan lhug par bkrol pa mthong ba don ldan* (Delhi: Karmapae Chodhey, 1981) .

和　　訳

善人は太陽、悪人は暗闇

目に見える相を詳しく調査すると、世間における善人と悪人とのこの区別が認められる。太陽は全てを明かりで輝くものとし、暗闇は全世界を暗くする。（1）[4]

カリヤーナカーリン王子とアカリヤーナ王子

一切智者は前世の出来事を残らず見廻されて、
まさにこの物語の初めに、世尊は再び語られた。（2）[5]
パータリプトラという都市に地上のインドラ神であり（Puraṃdaraḥ）、
多くの功徳の倉庫である、プランダラ（Puraṃdaro, Tib: ’byer ’jig）という名前の王がいた。（3）
彼の息子はカリヤーナカーリン（Kalyāṇakārin, Tib: dge byed、善行者）[6]（という名前）で、多くの美徳で卓越していた。（いっぽう）アカリヤーナ（Akalyāṇa, Tib: mi dge byed、悪行者）[7]という名前の、2番目の息子は美徳がなかった。（4）

布施を喜ぶカリヤーナカーリン王子

カリヤーナカーリンは、全ての乞食者に対して慈悲深い如意樹であり（karuṇā-kalpapādapaḥ）、布施を習慣としていたので、父の財産（のうち、王権の象徴である）日傘（chatra-）[8]だけが残った。（5）

4　韻律は Vasantatilakā。

5　第2偈から第25偈までの韻律は Anuṣṭubh。

6　（S: 111: *ll.* 7-8 ）ではこの王子が生まれたとき、何千もの多くの善きことが現われたために（devāsya janmani anekāni kalyāṇasahasrāṇi prādurbhūtāni）この名前がついたとする。（根 :179a）では「王子生時、百千吉祥皆悉現前」とある。（四 :911a）も同じ。いっぽう（賢 :410b-c）では、第1夫人の蘇摩に王子が生まれたが、とても端正であった。相を占う者（相師）は「此児相好、人中難有。聡明福徳、不可逮及。」と褒め称えた。この夫人は本来嫉悪で、人の過失を楽しんでいたが、懐妊して以来、性格を変え、他人に対して慈仁となり施恵を修めたので、相師は王子を迦良那伽梨と命名したとある。

7　（S:111: *ll.* 18-19）では次の王子が生まれたとき、何千もの不吉なことが（akalyāṇasahasrāṇi）現われたためにこの名前がついたとする。（根 :179a）では「王子生時、百千災厄不吉祥事、皆悉現前」とある。（四 :911b）も同じ。いっぽう（賢 :410bc）では、第2夫人の弗巴に王子が生まれたが、平凡な相であった。この夫人は先の第1夫人とは反対に、人となりは慈順であったが、懐妊して以来、性格を変え、悪を楽しむようになったので、相師は王子を波婆伽梨と命名したとある。

8　この日傘は（S: 111: *l.* 3）では、「頭は日傘の姿をした」とあるように、王子の頭の姿の描写に用いられている。（S: 111: *l.* 23 ）では、あまりに布施をする王子に対して父王が「息子よ、汝はいつも布施を実行してはいけない。」（putra mā tvaṃ satataṃ dānam anuprayaccha）と諫めたとある。

カリヤーナカーリン王子とマノーラマー姫との結婚の約束

プンヤセーナ王は（Puṇyaseno, Tib: bsod nams sde）、手紙をもって使者を遣わせて、
彼にマノーラマー（Manoramāṃ, Tib: yid dga' ma）という名前の自分の娘を、言葉をもって与え（るという約束をし）た。（6）

カリヤーナカーリン王子、結婚式の前に海に出て宝を探す

さて、結婚式が近付くと、王子は王に言った。
「父よ、結婚式が来ました。（しかし）今、これ（結婚式）は私の気に沿いません。（7）
愛情と優しさによって、もとからあった財産が、狂酔に[9]とらわれました。
布施を好む私によって、あなたの倉庫が空にされました。（8）
だから、私は船によって大海を横切って、
素晴らしい宝石を手に入れようと決意して、宝の島に（ratnadvīpaṃ）行きます。（9）
素晴らしい財産を（divyasaṃpadam）得てから、私は妻を娶りましょう（dārasaṃgraham）。
財産を持っていない人にとって、妻は幸福の達成を脅かすものです。」[10]（10）【格言①】
と言って足許に跪くと、彼は父の命を得て、
空が揺れる波で抱かれたような海に入った。（11）

宝石の入手と船の難破

若い方の兄弟（つまり弟）は、善良さを装って彼に付いていった。
徳がなく、徳ある人を憎んで危害を与えようと心の中で考えた。（12）
兄は彼に言った。「弟よ、業の悪報から（karma-viplavāt）、海で
船の難破が起こった時には、君は私の肩につかまりなさい。」[11]（13）

（根 :179a）も「自今已後、不応如是恒行布施。我国庫蔵、不可蘇供足。」とある。（賢 :411a-b）では、太子は蔵の宝の 3 分の 2 を布施し、残りわずかとなっているのに、その残りの 3 分の 2 を布施して、ほとんど残らなくなった（余残少許、当俟信遺）とある。

9　テキストは mada- であるが、de Jong は mudā-（喜び）の可能性を指摘する。チベット訳では、dga' las dpal 'byor drag tu（P: dag tu）blangs「喜びから財産を精力的に受け取った」と解釈できる。

10　（S: 111, *ll.* 29-30）では、「財産を得ないうちは私は妻を娶りません。」と言って、父の許しを得ると、商品を（paṇyam）もって大海に出かけた、とあり、外国との交易を伺わせる内容となっている。（根 :179a）では、「不欲費損、父王庫蔵。我今入海、自求珍宝、得已娶妻。」とあり、珍しい宝を求めて海に入るとある。（賢 :411c）も同じ。（四 :911b）はより具体的に、海に入って如意珠を取り、それによって閻浮提の衆生のなかに貧者がいないようにするとある。

11　テキストは、ahaṃ grāhyas tvayā skandhe jāte pravahaṇakṣaye とある。いっぽう（S: 112: *ll.* 22-23）では、〈yadi〉tad vahanaṃ vipadyeta, mama gale lageḥ（もしその船が難破するようなことがあれば、私の喉につかまりなさい）とある。（根 :179a-b）も「此船海中忽逢難破、汝応捉我。」とある。ところが、チベット訳ではデルゲ版で、/khyod kyi（P: kyis）phrag par bdag blang bya/ となるので、「君の肩に私は受け取られるべきである」となる。

と、兄によって元気づけられると、「そのようにします。」と嘘吐きの彼（弟）は、彼（兄）に言った。
悪を企てる悪人は、愛情深い態度をとるものだ。(14)【格言②】
そこで、船に乗った王子は、進む福徳のような、風によって順調に宝の島に至って、(15)
素晴らしい宝石を手に入れて、そしてゆっくりと王子が帰路についた時に、
すぐさま嵐が船を壊した。[12] (16)
その船が壊れた時に、以前の約束通りに（pūrvasaṃvidā）、
かの嘘吐きの弟は、彼の兄の喉に蛇のようにつかまった。(17)

兄が眠っていると、弟は兄の目をくりぬいて彼の宝石を奪う

業の風に（karmavāta-）吹かれて、王子は素早く岸に着くと、
すぐさま暗黒の最初の使者である眠りに就いた。(18)
彼（兄）が眠っていると、残忍な弟は（兄に）縛りつけられている宝石を見て、
（兄が眠りという）弱った悪い状態の時に（vyasanacchidre）[13]（宝石を）奪おうと企てた。(19)
彼（の弟）は（宝石と）きつく縛られている彼（の兄）[14]の蓮の花のような目を（nayanāmbujam）[15]くり抜いて[16]、
彼の瞳を、恐ろしい海を渡れない状態にした。[17] (20)
彼（の弟）が宝石を取って行ってしまうと、（兄の）王子は[18]輝きを失った。
まるで象に蓮の花を引き抜かれた蓮池のようになった。(21)
彼（兄）は光を奪われ、激しい悲しみという暗黒に包まれた。
まるで太陽と月のない、黒半月（kṛṣṇa-pakṣa）の夜の（-kṣapā-）[19]始まりのようであった。(22)

12　難破の原因は（S: 113: *l.*4）ではマカラ魚（makareṇa matsyajātena）とある。（根 :179b）も摩竭魚とある。

13　（S: 113, *ll.* 9-19）では、「彼が深い眠りに落ちていると」（tasya gāḍha-middhāvaṣṭabdhasya）とある。vyasanacchidre は、チベット訳で、gdung ba' i khung bur「苦悩、煩悩の穴に」。

14　注10の gāḍhamiddhāvaṣṭabdhasya の変形した読みの可能性もあろう。

15　de Jong は nayanāmbuje と読むべきだとする。

16　（S: 113: *ll.* 10-11）では、棘をもって両目をくりぬき、盲目になった彼を海岸に放置して（弟は）出発した（kaṇṭakaiś ca akṣiṇī utpāṭite; sa tam andhaṃ samudratīre chorayitvā prakrāntaḥ;）、とある。（四 :912b）では、佉陀羅木刺で両目を刺した、とある。

17　原文は taṃ tārakaṃ bhayāmbhodhau cakāra gata-tārakam であるが、今一つ意味がはっきりしない。2つの tārakaṃ には様々な解釈の可能性がある。

18　テキストは vājasūnur であるが、意味がとりにくい。de Jong は rājasūnur と読むべきだとする。ここでも彼の読みに従った。

19　- ここでは -pakṣa-、-kṣapā- という音の遊びが認められる。

牛飼いが盲目の彼を保護する

そうしている間に、その場所に牛飼いが（gokulādhipaḥ）[20]近付いた。
目の見えない王子を見て、彼（の王子）の苦しみが（牛飼いに）反映した（かのようになった）。(23)
彼（の牛飼い）は彼（の王子）を自分の家に連れて行くと、立派にも面倒を見ることに専念した。[21]
（王子は）彼（の牛飼い）の美徳、優しさ、愛情の感化力に支配されていた。(24)

王子、気晴らしに琵琶を演奏

そこで、憂いと苦しみを鎮めるために、常に、心の気晴らしをする、
以前に練習した琵琶を、音に巧みな彼（の王子）は演奏した。(25)
よき人との交わり、分別ある大部の話を用いること、
美酒の如き詩歌、親しい友への愛情、娯楽、
琵琶の音、花で美しい森に住むこと、
（これらは）心が悲しみの火で心が焼かれた人たちにとっては、甘露に浸る（に等しい）。(26)[22]【格言③】

牛飼いの妻、王子に淫欲を催し、誘惑する

かの牛飼いの妻は、歌と琵琶に長けていたが、
王子を見ると、淫欲を催した状態になった。(27)[23]
邪な彼女は、常に正しい人の道（-upadeśā）を受けていたけれども、まるで琵琶によるかのように、
起こったばかりの愛欲によって、正気を失い、（王子との）交わりを強く望んで考えた。(28)
「このとても美しい男性は、今私の視線と心に入っている。
私の熱情の苦しみは（tāpaḥ）は、起こらなければ、終わらない。(29)
（この愛欲ある女性が、［男性が］爪を立てることによって何度となく喘ぎ声出すのが幸せであるように）、（演奏の）爪を立てることによって、このラーギニー調のメロディーが何度も音を出すのは、なんと幸せであろうか。

20　(S: 113: *l.* 11) には gopālakā（牛飼い）、(根 : 179b) には「牧牛人」とある。

21　テキストは paricaryā-paraḥ paraḥ と音の連続が認められる。

22　韻律は Vasantatilakā。

23　第27偈から第69偈までの韻律は Anuṣṭubh。

彼の琵琶（vallakī）は、功徳によって（puṇyair）[24]（彼の）腰[25]に載せるのに相応しくなった。」（30）
このように考えて、彼女は優しく、艶めかしく彼に言った。
「（私の）震える指は、この（あなたの）蓮のような手に触れています。（31）
私のこの心はあなたに向かっているため、女性がとりやすい恥じらいや、
喜びを、まるで恩知らずの者であるかのように思い出しません、尊敬すべきお方よ。（32）
愛欲に押し流され、恥じらいを欠いた女というものは、
正しい行い、善き家系に相応しい行動、自尊心、心配を考慮しないものです。（33）【格言④】
後生ですから、私の意向を実りあるものとして下さい。
女神のように敬われると、女性というものは喜ぶようになるものです。」[26]（34）【格言⑤】

王子の拒否

このような彼女の[27]声の調子が壊れて、抑制が利かなくなったような言葉を聞いて、
王子は内心恐れながらも、動揺する彼女に言った。（35）
「ご婦人よ、この正しい行いから逸脱することは善人に相応しくありません。
なんということでしょう、正しい行いを失くした人の人生は、罪という毒に触れた（ようなものです。）（36）
肢体で他人の妻を抱きしめることに同意する人、
この者は地獄の火の炎を再び抱く蝶（pataṅga）である（かのようです）。（37）【格言⑥】
他人への奉仕を喜び、他人の妻に関心のない、
殺生しないことに努める人が生きているのであって、その他の人々は死んでいる（ようなものです）。」[28]（38）【格言⑦】

24　原語 puṇya は、功徳の他に妻が夫の気を引き子供を設ける儀式をも意味する。

25　チベット訳は、phang（=pang）「大腿部の前側」

26　（S: 113: *ll.* 15-17）は、彼の牛飼いの親戚の妻が若い男への劣情にかられて、琵琶の演奏を聴くと、彼を誘惑し始めた（tasya pālabandhor bhāryā yauvanamadākṣepāt vīṇāsvanaṃ śrutvā taṃ prārthayituṃ pravṛttā）とある。（根 :179b）は「牧牛人妻、心生愛念。即起染欲、語盲人云。共我行私。」と、どちらかと言えば、S よりも今回のテキストに近い内容となっている。

27　原典は tasya であるが意味がとりにくい。ここではあえて女性形の tasyā と読んだ。

28　（S: 113: *ll.* 17-18）は、彼女の誘惑の言葉を聞きいれれば、牛飼いに対する忘恩の行為になるのではないかと思い、両耳を塞いだままでいて、彼女の言葉を染み込ませようとしなかった（sa kṛtaghnaceṣṭitam anusmṛtya karṇau pidhāyāvasthito nādhivāsayati; ）と説明する。（根 :179b）にも、「盲人聞已、両手掩耳白云、勿出此語。我不欲聞。汝是我妹。」とある。

牛飼いの妻の讒言

このように彼に言われたことを聞くと、彼女は熱情が壊されてしまった。
女性たちにとって性愛の喜びを（prīti-）禁止されることは、死よりも（辛いものだ。）(39)
【格言⑧】
そこで熱情が壊されてしまったので、雌蛇は自分の夫に近づくと、
怒りの毒を吐き出すかのように彼女は言った。(40)
「善き夫よ、純真なあなたが、他人に[29]同情することは罪です。
正しい行いを知らない人たちのうちの誰が家を自由にできましょうか。(41)
あなたが他人をとても信頼することは、徳の高いことではありません。
心や財産が隠されていれば、どの人が（それらが）誰の所有物であると知るのでしょうか。(42)
他人の妻を（誘惑する）インドラ神[30]のような盲目の彼を、
哀れな盲目の人に対する優しさから、あなたは家に留め置かれました。彼に相応しい結果を見なさい。(43)
今日、私は人のいない所で、彼によって（男女の）交わりを（saṃgame）激しく求められました。
もし彼の両目（の視力）があったのならば、私はどのようにして逃げ出せたでしょうか。」[31]（44）

牛飼い、妻の讒言を信じて王子を追放

このように彼女に言われると、彼の牛飼いの主は怒りからとても熱くなって（tapto）、
彼（の王子）を遠くに追放して、家と心を（怒りの熱から）冷ました（śītalam）。(45)
父が息子を見捨てること、友人が仲間を殺すこと、
それらは、親戚をも切るような剣を持つ妻たちにとっては欠伸（vijṛmbhitam）[32]（程度）である。(46)【格言⑨】
両眉は曲がっており、両視線は鋭く、不安定であること（cāpalam）、
両乳房が固くなること、これらのすべては女性の心にある（がままである）。(47)【格

29　サンスクリット語の paravatsalatā をチベット訳では mchog tu mnyes「最善の敬愛」と訳す。

30　インドラ神は偉大な賢者ガウタマ（Gautama）の妻アハリヤー（Ahalyā）を誘惑する。Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1975, p.17を参照。

31　（S: 113: *ll.* 19-20）に、「この盲目の人が私を求めています。あなたはこのような人にさえ保護を与えています。」（mām ayam andhaḥ puruṣaḥ prārthayati; īdṛśānām tvaṃ saṅgrahaṃ karoṣi iti; ）という讒言がある。（根 :179b）は「彼無目人、欲淫穢我。如何家内、養此悪人。」と本テキストに近い内容を記す。

32　チベット訳では spyod tshul「（妻たちに共通する）行動様式」とする。

言⑩】

カリヤーナカーリン、隊商に助けられ、プンヤセーナ王の都に到着

（一方）カリヤーナカーリンは[33]、次第に隊商によって道から救われると[34]、
父が天国に行ったので、弟が王になったと聞いた。(48)
彼は長旅の疲れを癒す親戚のいる、義理の父であるプンヤセーナ王の都に、時を経て到着した。(49)

マノーラマーによる婿選び

そうしている間に、王の娘であるマノーラマーが、
以前口約束で彼に与えられた（けれども）、その彼が海に落ちたと告げられたので、(50)
王たちは呼ばれると、順番に（その都に）駐屯し（niviṣṭeṣu）、
宝石の輿に乗って婿選びの（svayaṃvara-）[35]場所に行った。(51)
彼女は震える目でゆっくりと王たちを見て、
そこに偶然やって来た、かの王子（カリヤーナカーリン）を見た。(52)
彼は盲目であっても、すぐに彼女の視線に好ましいものとなった。[36]
惑星の間にある月が、雲で隠されたとしても、夜に咲く蓮（kumudvatī）によって愛される（ようなものだ）。(53)【格言⑪】
王たちは果報を得られなくなって、恥じて帰った。
王女は美徳のない盲目の彼を選んだ。[37]（54）
切れ長の目をした彼女は、彼（のカリヤーナカーリン）の首に花輪を投げかけて、

33　テキストの kalyāṇakārisārthena は文法的に疑問が残る。ここでは de Jong に従って kalyāṇakārī sārthena、と読んだ。

34　（S: 113: *ll.* 22-23）は、「彼（の牛飼い）によって追放された彼（の王子）は、大道・路地・辻・四辻にて琵琶によって生計をたてた。」（sa tena gṛhān nirvāsitaḥ rathyā-vīthī-catvara-śṛṅgāṭakeṣu vīnayā jīvikām kalpayati;）と記す。（根：179b）も「其無目人、抱琴而去。巡歴城邑、乞求活命。」と琴を奏でで町や村を周り、生計をたてたとある。

35　この婿選びの儀式については S. Sörensen, *An Index to the Names in the Mahābhārata,* Delhi: Motilal Banarsidass, 1978（1904）, pp. 671-672 を参照。

36　（S: 114: *ll.* 19-20）は、琵琶の音色に心を奪われた王女が王子のとりことなった（tataḥ rājakumārī vīṇāsvanāvarjitahṛdayā vīṇāvādake kalyāṇakāriṇy ākṣiptā;）と記す。

37　原文は（mahīpatisutāntas taṃ vavre guṇavinirgatam //）とあるが、意味がとりにくい。de Jong は mahīpatiḥ sutām andhavaraṇena（....?）という読みの可能性を指摘するが、これも今一つである。（S: 114, *l.* 25）は、「盲目の男が夫として選ばれたのか」（andhalakaḥ svāmī vṛtaḥ? iti;）という表現を用いているので、ここでは、恣意的に mahīpatisutā andhaṃ taṃ vavre guṇavinirgatam // と読んだ。チベット訳では、/skyengs shing log nas song ba'i tshe/ / bu mo sa bdag gis phyir bskrad/「（王たちが）恥じて帰って行った時、女の子（マノーラマー）は王によって追い出された。」とある。

ゆっくりと心地よい調子で、「私はあなたの思いのままです。」(tvadvaśāsmīty) と彼に言った。[38] (55)

王子の拒否

女性の行為に（-vṛtta-）恐れて、彼は人気のないところで彼女に言った。
「知識に乏しいあなたがなされたことは、女性に適切なものではありません。(56)
愛の神（smara）や友情の神（sauhārda）の友である、蓮の花のような目をした王たちがいるのに、
生まれた甲斐のない盲目の私が、どうしてあなたによって選ばれたのでしょうか。
(57)
目が見える者たちの妻たちでさえも、他の（男の）顔を見つめます。
ましてや、盲目の者の妻は白昼でも他の（男に）会いに行くものです。(58)【格言⑫】
女性が私のために為すべきことはありません。私は彼女たちに信頼をおいてはいません。
川が岸を（-kūla-）破壊するように、女性というものはねじ曲がっており、家を（kula-）破滅させるものです。(59)【格言⑬】

王女の真実語

このように彼によってきっぱりと言われると、王女は恥ずかしさで動揺して、
彼に言った。「御主人様、全て（の女性）に疑いを抱くべきではありません。(60)
もしあなたが非常に疑いをもって、ある女性に過失を見るならば、
その（過失）に満たされてしまうと、どうして過失のない女性を過失ないものとすることができましょうや。[39] (61)
もし、あなたに対してだけ私の喜びがあり、心が他の誰にも依存しないならば、
この真実によって、あなたに穢れなき目が一つ生じますように。」[40] (62)

38　(S: 114: *ll.* 20-21) は、「彼女によって彼に花の蔓が投げかけられた。『この人は私の夫に選ばれた』と言って。」(tayā tasya sragdāma kṣiptam: eṣa mama svāmī vṛtaḥ iti) と記す。

39　原文は aduṣṭāpi tvayā nāma tad-vyāptā kriyate katham //（過失のない女性でも、あなたによって、どのようにしてその（過失）で満たされたものとされるのでしょうか。）とあるが、今一つはっきりとしない。de Jong は aduṣṭāduṣaṇam idaṃ tadvyāptyā kriyate katham (?) と読むべきだとする。ここでは彼の読みに従った。

40　原典は、tvayy eva yadi me prītir ananyaśaraṇaṃ manaḥ /
tena satyena te netram ekaṃ bhavatu nirmalam //
いっぽう、(S: 115: *ll.* 4-7) は次のようにある。即ち、「その真実、真実語によって、彼のカリヤーナカーリンと貴方様の前にだけ愛情が起こりました。他の誰にも（起こっては）いません。この真実と真実語によって貴方様に一つの目が元通りに生じるように。」(yena satyena satyavacanena tasya kalyāṇakāriṇo rājakumārasya tava cāntike rāgaḥ samutpannaḥ, nānyasya kasyacit, anena satyena

このように美しい目を持つ女性によって言われるや否や、
真実語の力によって（satyānubhāvena-）、満開の蓮の花のような右目が彼に生じた。
(63)

王子による真実語

そこで王子は大喜びして、彼女の蓮華のような顔の美しさや美徳に驚いて、美しい目をした彼女をなだめて言った。(64)
「以前あなたが、父によって（guruṇā）の口約束で与えられた（相手の）、
カリヤーナカーリンという幸運な[41]王子は、他ならぬこの私です。(65)
まさにこの私が、視力の損失に対して全く敵意がないならば、
その真実によって（tena satyena）、私のもう一つの目が元通りになれ。」[42]（66）
このような真実の願いによって（satyopayācanena-）、すぐさま彼のふたつめの、汚れなき目も心と一緒に彼は得た。(67)
その後、出来事を知ったプンヤセーナ王によって援助されて、
彼は妻を伴って、自らの王国を得た。(68)

過去世と現世の結合

そのカリヤーナカーリンは、この私〔世尊〕であり、デーヴァダッタはかの弟である。
この前世の力によって、このようなことが現世でも起きているのである。(69)

---

satyavacanena tavaikam akṣi yathāpaurāṇam syād iti;)。（根：179c-180a）には以下のような真実語（ここでは、実信語）が説かれる。即ち「善行王子、及於仁処、情生楽欲、無異心者。願仁一目、平復如故。」また（賢:414a）は真実語（ここでは、自誓）として、「我今一心、共相尊奉。無有他意、大如毛髪。若当実爾、至誠不虚、令汝一目、平完如故。」と記す。

41 de Jong は subhage（愛妻よ）と読むべきだとする。

42 原典は、sa evāhaṃ yadi paraṃ nirvairaḥ pāṭane dṛśaḥ /
tena satyena nayanaṃ svasthaṃ bhavatu me 'param //
いっぽう、（S: 115: *ll.* 11-14）は次のようにある。即ち「その真実、真実語によって、私の両目をくりぬいた彼の前で、私には怨みの心はない。この真実、真実語によって私の二つめの目が生じるように。」（yena satyena satyavacanena tasya mamākṣiṇī samutpāṭayato 'ntike īṣad api na praduṣṭam cittaṃ me, anena satyena satyavacanena mama dvitīyam akṣi yathāpaurāṇam bhaved iti;）。（根:180a）は「我被悪行、刺我眼時。我心於彼、而無少恨。斯言若実、我之一目、平復如故。」とある。（四:912c-913a）は「我於彼人、無有悪心。若我真誠無虚者、眼当平復如故。」と記す。また（賢:414a）は自誓として、「若我於彼、波婆伽梨、無有微恨、大如毛髪。我言至誠、不虚欺者、当令一目、復得平復。」を記す。真実語については、若原雄昭「真実（satya）」『仏教学研究』（龍谷仏教学会）、第50号（1994年）、38-72頁のほか、中村［2008: 91-94］を参照。

比丘たちの驚き

かの比丘たちは、このように優れた、奉仕で輝く、菩薩の行いと、
それに匹敵するほどの、悪人の行為を聞いて、比較できないほどの驚きに至った。
(70) [43]

スダッタ長者の物語
—『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第34章—

解　　説

この章はナンダ・ウパナンダ竜王とプラセーナジット王との物語、さらにはスダッタ家の物語との2つが併合されている。その要約を示すと以下の通りである。

① 僅かな残りでも布施されると、素晴らしい特別な功徳を生む。(1)
② ナンダ竜王・ウパナンダ竜王がプラセーナジット王に供養や礼拝をしなかったので、王は怒る。二匹の竜王は剣の雨を降らす。(2-4)
③ 一切智者によって派遣されたマウドガルヤーヤナ（目犍連）は剣の雨を、紅蓮華と青蓮華に変える。王は世尊の命により二人を許す。(5-6)
④ 夜、王宮に火事が起こり、そのため夜灯火を転じることを禁止。(7-9)
⑤ スダッタの息子のリッディバラが無実の罪で処刑される。(10)
⑥ 息子がいなくなったため、スダッタはあるだけの財産を布施し、一パナ銅貨を残すのみとなる。わずかの布施しかできなく恥じ入る彼に、世尊は誠信をもって布施されるとほんのわずかのものでも黄金の山と同じ功徳があるとして、過去世の物語を話す。(11-14)
⑦ ヴェーラーマは多くの布施をなしたが、誠信が欠如していたため、それほど増大しなかった。また多くの人に布施するより、一人の悟りある人に布施するほうが功徳は多い。(15-18)
⑧ スダッタ、夜に灯火を使用した咎で捕らえられる。神々は保釈金を与えようとするが、彼は拒否する。神々は街に火を起こし、王が彼を解放すると、鎮火する。(19-22)
⑨ 王に挨拶をしないスダッタを彼は処罰しようとしたが、神による王の懲罰により、王はついに彼に恩赦を与える。(23-27)
⑩ 世尊に近侍する功徳。(28)

スダッタ（須達）は釈尊に祇園精舎を布施したことで有名な資産家（grhapati）とし

---

[43] 韻律は Rathoddhatā。

て有名である。彼がここに精舎を建て仏陀に寄進しようと、土地に金貨を敷きつめて本来の持ち主の祇陀太子（Jeta）から譲り受けたとされる。スダッタはまた身寄りのない者を憐れんで食事の布施をしたことで知られ「給孤独長者」（Skt., Anāthapiṇḍada; Pāli, Anāthapiṇḍika）とも名づけられる。

このスダッタは布施を好み、ついには一パナ銅貨を残すのみとなってしまった。満足な布施ができないと恥じ入っている彼に世尊は、誠信を持って与えられれば、ほんのわずかな布施でも黄金の山の状態となると彼を説得する。そしてバラモンのヴェーラーマによってより多くのものが布施されたが、誠信が欠如していたためそれほど増大はしなかった。また閻浮堤にいる全ての人を信愛を持って食べさせる人と、さとりある者一人を食べさせる人とでは、後者の功徳の方がより増大するという真理の言葉を説く。

この話と類似したものとしてパーリの Velāma Sutta（Aṅguttara Nikāya, vol. 4, pp. 392-396）をあげることができる。ここで、給孤独長者（Anāthapiṇḍiko gahapati）はあらゆる財産を失い、粗悪な糠飯と酸粥（lūkhaṃ kaṇājakaṃ bilaṅga-dutiyan ti）しか比丘に布施できないと仏陀に嘆く。仏陀は、食物の質が問題ではなく、施者が恭敬せずに布施したり（asakkaccaṃ deti）すれば、不恭敬によってなされたの業の果報（asakkaccakatānaṃ kammānaṃ vipāko）を受けるが、反対に恭敬して施せば、施物がどんなものでも、恭敬によってなされた業の果報を受けると説く。次いでヴェーラーマ（Velāma）バラモンの布施物語が説かれる。彼は多くの布施を行じようとしたが、相応しい受け手を（dakkhiṇeyya）見つけることができなかった。布施するのであれば、四向四果、さらには如来に布施するのが一番効果がある。さらに布施よりも、僧院の建立、それよりも三宝への帰依、それよりも五戒の保持、それよりも慈悲心の実践、最終的には一瞬でも無常想を修習すること（aniccasaññaṃ bhāveyya）のほうが、より大きな果報があると仏陀は説く。

これと同一の内容は『中阿含経』第155の「須達哆経」第4（大正1、677a-678a）に認めることができる。ここではヴェーラーマは随藍という名で訳されており、最終的に一番大きな果報を生じるのは、一切諸法が無常であり苦であり空及び非神であると観察することだと言う（678a）。

冒頭のナンダ・ウパナンダ龍王とプラセーナジット王のエピソードと類似した内容は、『根本説一切有部毘奈耶』巻44（大正23、868a）と『増一阿含経』巻28（大正2、704b-c）にも認められる。いずれも BAK における前章である第33章『ナンダ・ウパナンダ龍王の物語』の続きとなるアヴァダーナで、二龍王が人間の姿をとって釈尊の聴聞に出かけたところ、同じく聴聞にきたプラセーナジット王と出くわすことが事の発端となる。王は二人が龍王であるとは知らずに、挨拶されずに腹を立ててしまう。そして王が二人の斬首を計画するが、それを知った龍王たちが怒り、雲を起こして雨や雹を降らし、虚空から刀や杖などを降らす。世尊によって派遣された目犍連は武器などを天花などに変

える。後に世尊の働きによって王と龍王は和解するという内容である。なお、龍王(ナーガ）が武器を降らせるエピソードは、ナンダ・ウパナンダ龍王に限らず、BAK 第46章（チベット訳47章）の「Śālistamba-avadāna（シャーラの木の物語)」、第70章「Mādhyantika-avadāna（マーディヤンティカの物語)」にも見られる。

和　　訳

布施の功徳

もし、他人の利益を考えて、少ない財産のごく僅かな残りでも布施されるならば、
不滅の美徳の作用によって、素晴らしい特別な功徳が生じる[44]。（1）[45]

ナンダ・ウパナンダ竜王とプラセーナジット王

さて、昔ある時、ナンダ竜王とウパナンダ竜王が（Nandopanandayor）世尊の側に、
法の説示を聞こうとやって来た時に[46]、（2）[47]
プラセーナジット王も（Prasenajid, Tib: gsal rgyal)、世尊に会おうと近づいた。
（しかし）彼ら二人から供養や礼拝されなくて怒った[48]。（3）
彼は勝者を礼拝して、（彼ら二人のところに）行って、彼ら二人の処罰を（nigrahaṃ）おこなった[49]。
剣の雨を（śastra-vṛṣṭiṃ）降らせながら、彼ら二人は空を通って彼（の世尊）のもとにやって来た。[50]（4）

44　原典は supuṇyaviśeṣaḥ であるが、少し冗長の感がある。ここでは de Jong の読みに従って、sa puṇyaviśeṣaḥ とする。

45　この韻律は不明。

46　原典は āyayau であるが、韻文全体の文法的構造がすっきりとしない。ここではここでは de Jong の読みに従って、āptayoḥ とする。

47　第2偈から第27偈までの韻律は Anuṣṭubh。

48　チベット訳では、/phyag ma byas pas khros（D: thos）bar gyur/「敬礼しなかったので怒った（D: 聴聞した)」

49　チベット訳では、/de dag chad pas gcad par bsams/「(王が）彼らを罰して処刑する、と考えた」となり、実際に処罰を行うのではなく、王による懲罰の企図を述べる。『根本説一切有部毘奈耶』（大正23、868a）には、「命左右曰。汝可伺彼佛邊長者辭佛去時。待至門外俱斬其首。彼二龍王所有部從。見王懷忿作是語已。悉皆驚愕怒而議曰。」とあり、『増一阿含経』（大正2、704c）には、「是時波斯匿王即從坐起便退而去。告群臣曰。向者二人爲從何道去速捕取之。」とある。いずれも、王が（人間の姿を取った）二龍王を捉えて処罰しようと企てたことを龍王が知り、龍王たちが怒って王宮に武器を降らせるという内容である。そのため、チベット訳はこの二つの漢訳仏典に近いと考えられる。

50　原文は śastravṛṣṭiṃ saṃsṛjantau tau ca vypomnā samāgatau // とあり、剣の雨を降らせるのは二匹の竜王とある。ただ直前の箇所で王が刑罰を彼らに行っているから、剣の雨を降らせるのは王と理解した方が自然であろうという考え方もある。de Jong も saṃsṛjatas tau ca tasmai vyomnā gatau と

一切智者によって派遣されたマウドガルヤーヤナ（目犍連）は（Maudgalyāyana, Tib: mau gal gyi bu）すぐさま行くと、
王のその剣の雨を、一連の紅蓮華と青蓮華にしてしまった。（5）
王は再び世尊の近くに行って、
彼の（世尊の）命により、やってきた二人の竜王を許した。（6）

王宮の火事とスダッタの息子の処刑

さて、王によって請われると、世尊は信愛によって清められた（bhakti-pūtaṃ）食事をとりに比丘たちとともに王宮に（rājamandiram）行った。（7）
その夜、食事が調理されている時に火事が（agniviplavaḥ）起こった。（しかし）勝者の威力によってすぐに静まった。（8）
世尊が召し上がられた後立ち去られると、王は夜に火を（点じることを）罰するおふれをもって（daṇḍasaṃvidā）禁止して、（その旨を）都の人に（svapure）布告した（abhyadhāt）。（9）
その間、資産家の家長である[51]スダッタの息子で、リッディバラ（Ṛddhibala, Tib: rdzul ’phrul stobs）という名の若者が、虚偽の過失のため王によって処刑された。（10）

スダッタによる僅かの布施

以前に彼は師である世尊の教えの恩恵によって堅固な智慧を得ていた。（そのため）息子に苦しみがあっても、（彼自身は）苦しむことはなかった。（11）
彼は息子が（亡くなって）いなくなったため、多くの自らの財産を貧者に与えたので、（貧者への）強い愛着から、次第に財産のうちの一パナ銅貨を残すのみとなった（ekapaṇaśeṣaṃ）。（12）
さて、彼は一パナ銅貨を持っていることであらゆる正義をなして、わずかながらでも布施をした。（彼は）スダッタ〔＝よく布施する者〕[52]と呼ばれる資産家（gṛhī）であったが、

読むべきだとする。ただ別の箇所の、目犍連によるこれらの竜の調伏では、剣の雨を降らしたのはこの二匹の竜となっている。一方チベット訳では、（前注に続き）/de dag gis kyang mkhar song ste/ /de la mtshon gyi char pa phab/「（彼らに処罰を行うと王が考えたところ、）彼らも空に行って、彼（王）に武器の雨を降らした」とする。散文版を参照すれば、mi de gnyis la chad pas cig/ gsungs pas/ klu gnyis kyis nam mkhar song ste rgyal po la mtshon cha’i char phab/「その（人間の姿を取った龍王）二人を処罰しろ、とおっしゃったので、二龍は空に行って王に武器の雨を降らした」とあり、チベットでは龍王たちが王に武器の雨を降らせたと理解されていると見ている。

[51] 原典は gṛhapatiḥ であるが、資産家の家長は息子ではなく、スダッタであるので、ここでは de Jong の読みに従って、gṛhapateḥ とする。チベット訳では、D: khyim bdag legs sbyin gyi「家長スダッタの」、P: khyim bdag legs sbyin gyis。

[52] チベット訳ではスダッタは「legs sbyin」で、「legs ster」とも呼ばれる、とする。

家は大変小さいと言われている。(13)
ある時世尊は、拝顔するためにやって来て[53]前に立っていたスヴァルパダーナ(Svalpadāna-, Tib: chung du sbyin pa)〔わずかな布施をする者〕という名前のように恥じ入っている彼に慈悲深くおっしゃった。(14)

ヴェーラーマによる布施の話

「資産家よ、ほんのわずかな布施に汝は恥ずかしがるべきではない。[54]
(なぜなら)誠信を持って与えられれば(śraddhārpito)ほんのわずかな布施でも黄金の山の状態となるからだ。(15)
以前にバラモンのヴェーラーマ(Velāma, Tib: be la ma)によってより多くのものが布施された。
誠信の欠如という(śraddhāviraha-)一般的な特徴により、それほど増大しなかった。(16)
閻浮堤にいる全ての人を信愛を持って(bhaktyā)食べさせる人と、さとりある者(bodhi-saṃyuktaṃ)一人を(食べさせる人とでは)、(後者の)彼の功徳の方がより増大である。」(17)
とおっしゃる世尊の真理の言葉を聞いて喜ぶと、彼の(世尊に)礼拝して資産家の家長(スダッタ)は自分の家に帰った。(18)

スダッタ、夜に灯火を使用した咎で捕らえられる

夜に灯を与えて、そこで仏の教えを(buddhānuśāsanam)唱えて(読んで)いると[55]、彼は(夜に)火を使っていたことから、王の家臣によって刑罰に処せられた。(19)
(支払われるべき)罰金がなくて[56]、縛られて牢屋のなかにいる彼を見ようと、夜にインドラとブラフマーを始めとする神々がやってきた。(20)
彼は「(保釈金となる)お金を(dhanaṃ)受け取れ。」と彼ら(神々)から請われたが、受け取らなかったので、

53　原文は kadācid darśanāyātaṃ であるが、文法的には kadācid darśana āyātaṃ であろう。

54　原文は alpadānaṃ gṛhapater であるが、意味がいまひとつすっきりしない。ここでは de Jong の読みに従って alapdāne gṛhapte として訳した。

55　原語は paṭhan、チベット訳は klog pa。灯りの下で文字を読んだと思われる。とすれば容易に文字による仏典の存在を推測できよう。

56　原語は daṇḍasya saṃbhavād であるが今ひとつ文意がはっきりとしない。ここでは daṇḍasyāsaṃbhavād「罰金がないから」と読んだ。チベット訳では、chad pa'i dnogs bo med pa na「罰金(として支払う)ものがないとなれば」とある。スダッタに罰金を支払う能力がなく、その代わりに牢屋に入ったことが示されていると見た。この罰金(この場合は sāhasa)に関しては、『マヌ法典』9.240-241,『ヤージュニャヴァルキャ法典』1.365を参照。一方『カウティルヤ実利論』III.17では、daṇḍa を罰金の意味で用いている。

その時この正義の教えが（dharmopadeśo）彼の家で実践された[57]。(21)
彼ら（神々の）威力によって、王はまた街に火がつくのを見た。牢屋から彼を解放すると火は[58]どこにも見あたらなかった。(22)

スダッタの恩赦

ある時彼（スダッタ）は善逝（世尊）に会いに行って、彼の面前に立った。
その後で王が勝者（世尊）に頭を下げにやってきたのを見た。(23)
彼（スダッタ）は、世尊の前では頭を下げたが、王にはそうしなかった。
世間の人に供養されるべき人の前では供養すべきだが、他の者には[59]そうすべきではない。(24)
王は勝者に挨拶をして、敬礼をしてから自分の町に帰った。
自分の都から資産家の家長の追放を命令した。(25)
そして神はスダッタに恩寵を与えようとして（prasādinī）、王に小さな生物を放して噛み傷や毒で王を悩ませた。(26)
王はそれら（小さな生物）によって悩まされると、大臣と後宮の女人に伴われて（勝者の許へ）やって来た。
（自身の都に）帰ると、勝者の教えによりスダッタに対して恩寵を与えた。(27)

世尊に近侍する功徳

このように、常に（世尊に）近侍することによって（pratyāsattyā）、最高の甘露で満ちた[60]、世尊が説かれた寂静を、彼のスダッタという資産家の家長は享受した。
清浄な心を持つ人の近くに住する者は、障害・苦労・追放のない、区別智という大きな宝を、まるで自分のものであるかのように手に入れるものだ。(28)[61]

57　チベット訳では bsags pa ’phel「集積・増大した」とあるが、de Jong も指摘しているように、pravṛttas「発動した」の読みでよいと思われる。

58　原典は dadarśa jalaṃ kvacit。チベット訳では gang du ang me ni mthong ma gyur /「火はどこにも見あたらなくなった」で、スダッタを解放すると、火が鎮火したことを示しており、文脈上妥当である。おそらく jalaṃ は jvalaṃ と訂正すべきであろう。

59　原典は nāparaḥ であるが、nāparasya と読むべきではなかろうか。ただその場合、韻律上は問題が生じる。デルゲ版の音写は、「nāparaḥ」である。チベット訳では、’gro bas mchod ’os sngon du ni/ /gzhan la mchod par ’os pa min/「世間によって供養すべき人の前では（供養すべきであるが、それ以外の）他の人に供養する価値はない」

60　原典は -uditaṃ であるが、de Jong は śāntiṃ を修飾する語として -uditām と読むべきだとする。そうすればその前の語、-nirbharaṃ も -nirbharāṃ と読むべきであろう。

61　韻律は Hariṇī。

作例解析

1.『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』の絵画セットについて

本稿に先立ち第32章（蔵訳33章）「ヴィシャーカ物語」と第33章（蔵訳34章）「ナンダとウパナンダ龍の物語」の和訳と絵画作例の解析を発表したが、その際に参照したタンカセットはナルタンの木版画を原画とするセット（以下、「ナルタンのタンカ」）と、シトゥ・パンチェンのタンカセット（以下、「シトゥのタンカ」）の二つであった[62]。その後、「ナルタンのタンカ」に遡る可能性がある、41幅からなるタンカ（以下、「41幅のタンカ」）を複写した刊行物を入手することができた。そのため本稿では、「41幅のタンカ」と、「ナルタンのタンカ」及び、「シトゥのタンカ」の三種のタンカセットを参照して解析したい（これらのタンカセットの一覧は表1を参照）[63]。

表1　チベットのタンカセット一覧

タンカセットの名称	概要	現存するセット（完本）所蔵（現在発表されているセットのみ）	カリヤーナカーリンの物語を表すタンカの作例	スダッタの物語を表すタンカの作例
「ナルタンのタンカ」	・ナルタン（チベットのシガツェ西に位置する）で開版された31幅のタンカ ・18世紀後半に成立か ・Tucciによって発表される。	・故宮博物院所蔵（1789年完成） ・チベットハウス（デリー）所蔵	故宮（右10）右上部 ナルタン（右10）右上部	故宮（右11）右上部 ナルタン（右11）右上部
「シトゥのタンカ」	・シトゥ・パンチェン・チューキ・ジュンネー（1700-1774）の指揮のもと作成 ・23幅からなる。1737年完成 ・パドマ・チューペルの著作に挿絵として使用される。	（断片的に内外に所蔵される）	ハンビッツ3-22　タンカ下部	Jucker 35タンカ中央 WT　148タンカ中央
「41幅のタンカ」	・41幅からなる ・「ナルタンのタンカ」と様式的に類似する ・ダライラマ5世が41幅のタンカを制作したことがあると文献に記されるが関連は不明（1671年完成）	・雍和宮所蔵（1745年完成） ・ダラムサラ所蔵（1730-40年完成）	Sciaky　No.13下部	Sciaky　No.14右上部

（タンカの作例について）
・故宮とナルタンの後のカッコはタンカに示されている中央のツォタンに対する配置方法の順番
・Sciakyの後の番号はedition Sciakyで提示される通し番号
・そのほかは書籍内の頁数

62　以下を参照されたい。引田弘道、大羽恵美「『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第32章、33章和訳」『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』第29号250-232、2014年。

63　「41幅のタンカ」は現在すべてが公開・出版されているダラムサラ所蔵のセットを参照する。*Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha*（Paris: Editions Sciaky, 1980）.「ナルタンのタンカ」と「シトゥのタンカ」については、先に発表した和訳の絵図解説を参照。注62に同じ。

「ナルタンのタンカ」は一具31幅、「シトゥのタンカ」が一具23幅からなるのに対して、「41幅のタンカ」は41幅で一具とする。絵画の様式は「ナルタンのタンカ」と酷似し、双方の関連が容易に推測できるが、「41幅のタンカ」の方が絵図で表す場面が多く、各タンカの構成が異なっている。すなわち、「ナルタンのタンカ」が一幅のタンカに例外を除いてほとんどのタンカに3話か4話のアヴァダーナを表すのに対し、「41幅のタンカ」は一幅のタンカに2話か3話を表す。「ナルタンのタンカ」には省略されている場面があり、「ナルタンのタンカ」にあって「41幅のタンカ」に描かれない場面はないと見ている。「41幅のタンカ」が現存する完全なセットとしては、中国・北京の雍和宮所蔵のセットと、インド・ダラムサラのダライ・ラマ14世所蔵のセットの二つが確認できる[64]。このうち、雍和宮のタンカのセットは一部のタンカの裏書から、1745年に完成して、当時のダライ・ラマ7世から雍和宮に贈呈されたことが分かっている。ダラムサラのセットは、ツォタン（「本尊タンカ」、中央に展示されるタンカ）に描かれる人物構成から、1730－40年頃に作成されたと見られ、いずれも18世紀前半に相次いで完成したと考えられる。なお、「シトゥのタンカ」も1737年に完成したとされるので、18世紀前半のチベットにおいてBAKのタンカ制作が盛んであった状況が伺える。

2. カリヤーナカーリンの物語の絵図解析[65]

2.1 「41幅のタンカ」と、「ナルタンのタンカ」における同定

「41幅のタンカ」ではダラムサラ版（現在ダラムサラに所蔵）に付される通し番号が13のタンカの下部に「カリヤーナカーリンの物語」が描かれる（図1）。中央に描かれる仏の座像の左足の下に、仏が仏弟子に説法をする情景が描かれるが、これがこの物語冒頭部分の世尊が前世の出来事を語り始めるシーンであろう（図2の右上隅：図2は図1の右下部分図）。その下には宮殿の中の情景が表されるが、そのうちの中央がカリヤーナカーリンの父王であるプランダラ王の宮殿である。その中庭では王子であるカリヤーナカーリンが布施を行っており、やってきた人々に布や穀物等を分け与える姿が描かれる。その右上はプンヤセーナ王の宮殿で、屋根の下にプンヤセーナ王とその娘のマノーラマーが従者を伴って坐す。タンカ左下部分にあたる図3では、右下に（タンカ中央下）

64　雍和宮の作例の一部については以下を参照。雍和宮唐喀瑰宝編委員会　『雍和宮唐喀瑰宝』(上)、北京出版社、35頁、2002年。

65　BAKに基づくチベットのタンカと直接の関係はないが、カリヤーナカーリンの物語については、インドのアジャンター石窟第一窟左廊壁面に描かれるとの指摘がある。王宮の場面と航海の様子および船が難破する場面が断片的に現存する。Schlingloff, Dieter, *Erzählende Wandmalereien*, 1, Vol. I, Harrassowitz 2000 184-194. 定金計次　『アジャンター壁画の研究』研究篇　中央公論美術出版、2009年、40頁。さらに、一場面だけではあるが、キジル石窟第178窟の窟頂右の菱形区画にも描かれる。『中国石窟キジル石窟二』、平凡社、1989年、194頁。

図1「41幅のタンカ」No.13

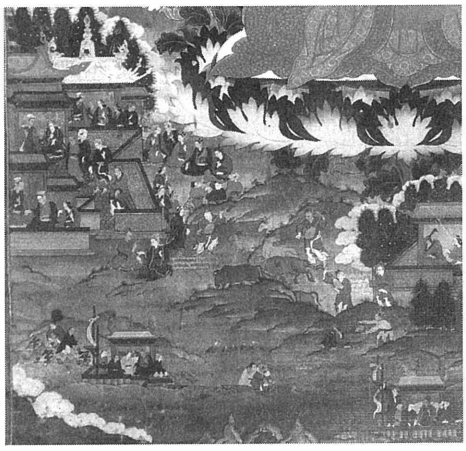

図３「41幅のタンカ」No.13　左下部拡大図
「カリヤーナカーリンの物語」

図２「41幅のタンカ」No.13　右下部拡大図
「カリヤーナカーリンの物語」

屋根と帆柱を持つ船に乗ってカリヤーナカーリンと弟であるアカリヤーナカーリンが出立する場面を表す。さらにその左には兄弟が宝の島に到着してサンゴや宝珠のような財宝を手に入れる場面を表し、その右に宝を船に積み込み帰途につく場面を表す。その右の海中では船が難破して兄弟が抱き合って船の破片に捕まっており、さらにその右の岸辺では、たどり着いた兄弟のうち弟が兄であるカリヤーナカーリンの目をくり抜くシーンが示される。その上に描かれるのは牛飼いに救われて、琵琶の演奏をすることで心を慰めるカリヤーナカーリンの姿である。さらにその左には琵琶を弾くカリヤーナカーリンと女性を描き、その下には向き合って座る二人の男性像を描く。牛飼いと彼の妻とともに生活するカリヤーナカーリンを表すと見られる。その箇所から再び仏座像下中央に戻ると（図２右）、屋根付きの家屋の屋内に男女二人が表される箇所が二つあるが、そのうちの下に表されるのが牛飼いの妻がカリヤーナカーリンを誘惑する場面を表すとみられる。右側に坐る男性が両手を肩の高さまで挙げて拒否するような動作をするのに対し、対峙する女性は右手をカリヤーナカーリンの足の上に置いて迫っているからである。その上は同じ衣装をまとった女性が前に坐る男性に話をしている姿を描くので、牛飼いの妻が夫に虚偽の訴えをするシーンを表すとみられる。カリヤーナカーリンはそのために牛飼いの元から追い出され、プンヤセーナ王の都にたどり着く。そこではその娘のマノーラマーの婿選びを行っており、タンカ左端（図３左）に描かれるのは、王宮に参じる婿候補たちである。マノーラマーはかつての婚約者であるカリヤーナカーリンを選び出すことに成功する。彼女の真実語によってカリヤーナカーリンの目が回復し、プンヤセーナ王にも援助され、妻と王国を手に入れた幸せな結末が王宮の部分の下部に表される。

「ナルタンのタンカ」では「右の10」と付されるタンカの右側部分に「カリヤーナカー

リンの物語」が描かれる（図4と5：図はタンカ右側を上下に分割し、上を図4、下を図5とした）。冒頭の仏が仏弟子に説法する場面がタンカ右上隅に描かれる（図4右上）。その下には宮殿の中の情景が表されるが、真下にはプンヤセーナ王とマノーラマーが坐す図、その下にプランダラ王の宮殿で王子であるカリヤーナカーリンが布施を行うシーンを表す。そこから下の図5では座像の仏の右下（図5左）にカリヤーナカーリンが海へ宝さがしに出かけるシーン、宝を得て船に乗り帰路につくシーン、船が難破して波を漂い、岸に着いて弟が目をくり抜くシーンへと続く。その上に（図5上）琵琶を弾くカリヤーナカーリンと牛たちが描かれ、牛飼いとの生活が描かれる。図4に戻りその中ほどに、牛飼いの妻の誘惑がダラムサラ版と同じく家屋の中に描かれる。妻が牛飼いの夫に訴えるシーンも同様である。その左にマノーラマーの婿選びのシーンが描かれる。

図4「ナルタンのタンカ」に基づく線描図
右部拡大図「カリヤーナカーリンの物語」

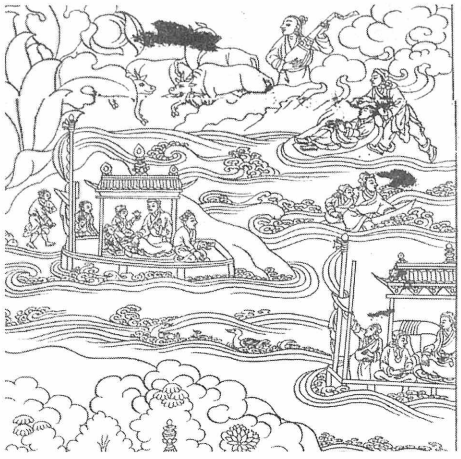

図5「ナルタンのタンカ」に基づく線描図
右中央部拡大図「カリヤーナカーリンの物語」

前述したように「ナルタンのタンカ」は上記の「41幅のタンカ」と一見すると非常によく似ている。絵図の構成が異なるため、同じ説話を表した絵図でも省略される場面が複数認められるが、個々のモチーフはほとんど同じであると言っていいだろう。背景となる樹木の形状や建築物の詳細は多少のヴァリエーションが見られるが、絵図中の人物の配置や動作の表し方はどちらかが手本となって模写した可能性が指摘できるほど酷似している。おそらくそれぞれのシーンをパズルのピースのように捉えてそのモチーフを模写しつつ、描きこむ場面については取捨選択していったのだろう。

2.2 「シトゥのタンカ」の絵図解析

「シトゥのタンカ」では「左4」と付さ

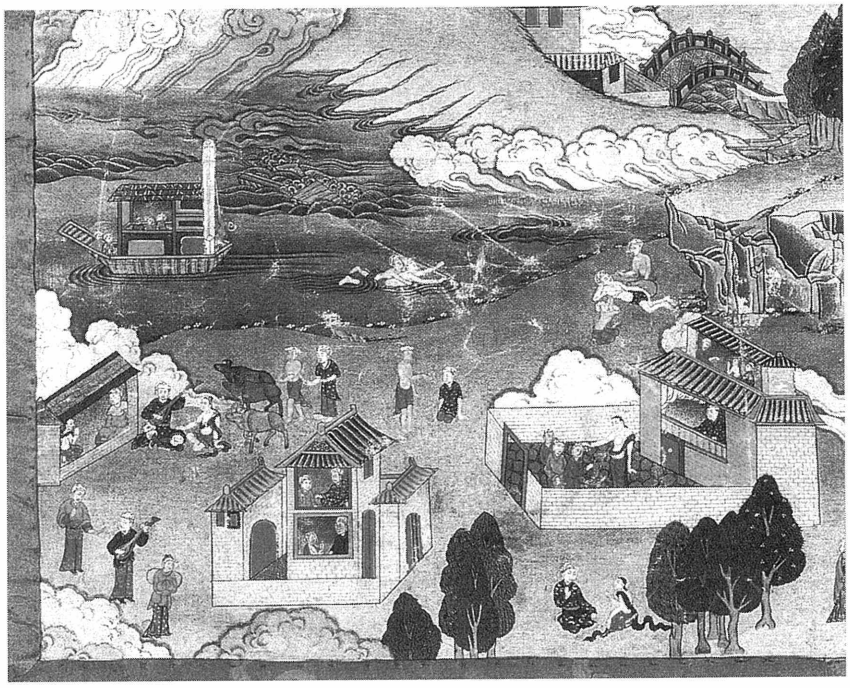

図6「シトゥのタンカ」（左4）左下部拡大図「カリヤーナカーリンの物語」

れるタンカの左下部分に描かれる[66]。前回の和訳と絵図解析で述べたように、シトゥのタンカは上記の「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」の系統には属さず、絵画様式や構成が完全に異なる。

図6（タンカ左下部分図）の左の海の部分に帆柱と屋根を持った船が浮かんでおり、これがカリヤーナカーリンの航海の様子を表すとみられる。航海に出る前にカリヤーナカーリンが布施行を行った場面や、マノーラマーと婚約をするような場面は省略されている。その右には船が難破して海の中に破片が浮かんでおり、岸に近いところではカリヤーナカーリンが弟のアカリヤーナカーリンを背に泳いでいるのが表される。その右の岸の上では横たわっているカリヤーナカーリンの目を弟がくり抜いている。そこから左下のシーンはカリヤーナカーリンが牛飼いと出会う場面である。カリヤーナカーリンは跪いており、その前に立つ牛飼いは上半身が裸で頭には白いターバンを巻き、腰に腰布を一枚付ける姿で表される。その左は牛と牛飼いとカリヤーナカーリンが表され、牛飼いが自分の家に連れ帰るシーンを表す。その左に続くのは牛飼いの妻がカリヤーナカーリンを誘惑するシーンで、座って琵琶を弾くカリヤーナカーリンの左膝に妻の手が触れ

66 「左4」の記入は韓国のハンビッツ財団所蔵のタンカに記入されると報告されている。田中公明『チベット仏教絵画集成』第3巻、臨川書店、2001年、60頁.

ている。さらに左には家屋の中で同じ女性が男性に向かって坐している。牛飼いの妻が夫に虚偽の訴えをするシーンであろう。カリヤーナカーリンは牛飼いの男に追い出されるが、そのシーンが下に描かれている。琵琶を弾いているカリヤーナカーリンの左に男性が立っているが、彼が牛飼いであろう。琵琶を弾いている男性の前（右下）に立つのもカリヤーナカーリンで、追い出された後の姿を表しているものと見られる[67]。そこから右に目を転じて図6右（タンカ中央下）にはプンヤセーナ王の宮殿が描かれ、マノーラマーの婿選びが行われている。宮殿の中庭に立つのがマノーラマーで、彼女の前で跪く男性に花環を授けている。その下は二人の男女が向かい合って座っている。カリヤーナカーリンがマノーラマーに人気のないところで彼女の選択をたしなめる場面であろう。同時に真実語によってカリヤーナカーリンの目は回復する。その左の二階建ての宮殿の中に人物が描かれる場面は、プンヤセーナ王の援助を得て、カリヤーナカーリンが王国と妻を得たという結びのシーンであろう。

3. スダッタの物語の絵図解析

3.1 「41幅のタンカ」と、「ナルタンのタンカ」における同定

「41幅のタンカ」ではダラムサラ版に付される通し番号が14のタンカの右上部に「スダッタの物語」が描かれる（図7：タンカ右部分図）。図7左上（タンカ中央上の右寄りに相当する）に仏が説法をする姿が表される。その前にはナンダとウパナンダが人間の姿を取って説法を聞く様子と、その背後から白い外套をまとったプラセーナジット王が従者を引き連れてやってくる場面が表される。その右上には雲の上にナンダ・ウパナンダ龍王の上半身が表され、下にいるプラセーナジット王と従者に武器の雨を降らせている。左隣にいる目犍連は左手を前に降ろし、神通力で武器を花に変えてしまう。その右の宮殿の中に描かれるのはプラセーナジット王とその前に坐る人間の姿を取るナンダ・ウパナンダ龍王で、王と龍王の和解のシーンを表すとみられる。その下の宮殿が表される箇所は龍王の物語に続くエピソードである。中央の世尊の頭の右（図7中央）に宮殿が描かれ、その中に比丘たちに囲まれて世尊が坐しており、彼らに対して俗人の姿の人物が給仕している。この夜に火事が起こり、世尊がそれを鎮めるのだが、火事の場

---

[67] Padma Chopel 前掲書には牛飼いがカリヤーナカーリンに記念に琵琶を与えたとの一文が挿入されており、その後もカリヤーナカーリンは「盲目の音楽家」や、「乞食の琵琶奏者」等と呼称されている。しかし前記の和訳のように、BAK では牛飼いと別れた後にカリヤーナカーリンが琵琶を所持していたとは記述されておらず、プンヤセーナ王やマノーラマーが彼を琵琶奏者であるとは認識していない。これまでに発表されている BAK のタンカにおけるカリヤーナカーリンの解説では牛飼いがカリヤーナカーリンに琵琶を贈呈して別れたことや、婿選びの際に盲目の音楽家を選んだこと等が記されるが、それらは BAK 本文ではなく、Padma Chopel の記述か、そのほかの類話に基づくものと考えられる。

面は描かれない。その右には王宮の中に王らしき人物が坐し従者に指図をしているような様子が二場面描かれる。一つが王によって夜に灯をともすことを禁ずる布告をしたシーンで、もう一つが、スダッタの息子の処罰を命じるシーンであると考えられる。その左下には刀を持った男性が前に坐る男性に手を掛ける様子を表している。スダッタの息子が処罰されたシーンである。その左には一人の男性が灯明を灯しペチャ（dpe cha: チベットの経本の伝統的な形態で細長い横長の紙の両面に文字が印刷される）を読んでいる。これはスダッタで、彼は火を使用した咎で牢屋に入れられる。右下に目を転じると牢屋にいるスダッタをインドラとブラフマーが訪ねている。その門からはスダッタが歩いて出る様子を表すので、彼が解放された場面を表すのであろう。その上は世尊が説法を行っており、そこへスダッタと王が挨拶に訪れる。スダッタが世尊に挨拶をしたものの、王には挨拶をしなかったので王を怒らせてしまう。このエピソードが冒頭のナンダ・ウパナンダ龍王が王に挨拶をしなかったエピソードとの因果となる。

図7「41幅のタンカ」No.14
右上部拡大図「スダッタの物語」

ナルタンのタンカでは（図8と9：図はタンカ右側を上下に分割し、上を図8、下を図9とした）、図8の左上に世尊が説法をする場面を表し、二人の俗人（二龍王）が合掌しているところへプラセーナジット王がやってくるシーンを表す。その右は雲から二龍王が武器の雨を降らせる場面で、下にいる王と従者が合掌し、その左には目犍連が左手を前に出して武器を花に変えている。龍王のエピソードに続くシーンはその下に描かれ、図8の左下に世尊と比丘たちに給仕をするシーン、その右に王が夜に火を灯すことを禁じる場面とスダッタの息子の処罰を命じる場面が描かれると見られる。図9上にはスダッタの息子を斬ろうとしている男性と、その左に灯を灯してペチャを読むスダッタ、その右（図9右下）に牢屋にいるスダッタをインドラとブラフマーを含む神々が訪問するシーンを表す。その左にスダッタの解放が描かれ、その上は再び世尊にまみえる王とスダッタのシーンで、王と右下の門脇にスダッタが描かれる。その右には一人の男性が世尊と話をしているので、王が世尊の働きによってスダッタに恩赦を与えるシーンだと考えられる。

3.2 「シトゥのタンカ」の絵図解析

「シトゥのタンカ」で「スダッタの物語」は蔵訳34章の「ナンダとウパナンダ龍王の物語」の絵図の下に続いて表される（図10：タンカ中央上部分図）。図10の右上に世尊が坐しており、世尊の右隣に白い衣服をまとったプラセーナジット王が合掌して坐し、

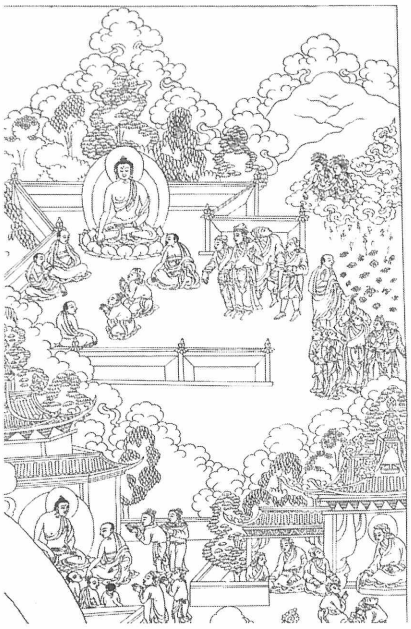

図８「ナルタンのタンカ」に基づく線描図
右上部拡大図「スダッタの物語」

図９「ナルタンのタンカ」に基づく線描図
右中央部拡大図「スダッタの物語」

世尊の前には二人の人間の姿を取ったナンダ・ウパナンダ龍王とさらに二人の人物を描く。その左下は白い衣装のプラセーナジット王と一人の男性が立っており、その前に一人の男性が立っているので、龍王がプラセーナジット王に挨拶をしなったシーンを表すのであろう。その左にはプラセーナジット王が、屋内に座っている姿が表される。これは挨拶をしなかったナンダ・ウパナンダ龍王に処罰を行うことにしたシーンであると考えられる。その上には雲が流れるように描かれ、その中には二匹の蛇の首があり、その中から短刀や鉤等の武器が下に落とされている。その下には白い衣装を身につけたプラセーナジット王が右手を頭の上に挙げて立っており、その右に目犍連が右手を挙げて武器を蓮に変えている。その左の建物は二階建てになっているが、上の階では世尊が弟子とともに坐し、その前にプラセーナジット王が合掌する姿で描かれる。その建物の左には炎が立って燃えており、世尊が食事をする間に火事が起こり、世尊の神通力によって消火されたエピソードを表す。その建物の一階には

屋内に二人の男性がおり、その外に跪いて物乞いをする二人の人物を描く。これはおそらく、スダッタが布施を行ったシーンを表すのであろう。スダッタはその後、夜に火を灯した咎で投獄される。その建物の左の東屋のような建物の中にスダッタと見られる男性が一人で座っているが、スダッタが牢の中にいるのを表しているのであろう。その建物の屋根の左側にも炎がかかっている。スダッタが捉えられて町が火事になる様子を表すとみられる。その下に歩いている男性を描くが、この場面はスダッタが解放されたシーンを表す。

4. まとめ

BAKのタンカにおける先行研究は主にBAK抄訳を参照して「ナルタンのタンカ」か「シトゥのタンカ」に表される絵図を同定するものであった。本稿でBAK原文和訳を参照して「41幅のタンカ」の解析を行うことで、これまで同定されなかった絵図をより詳細に、かつ正確に解析することができた。今回解析したタンカセットはいずれも、BAK原典を忠実に絵画化したものであると言えるだろう。

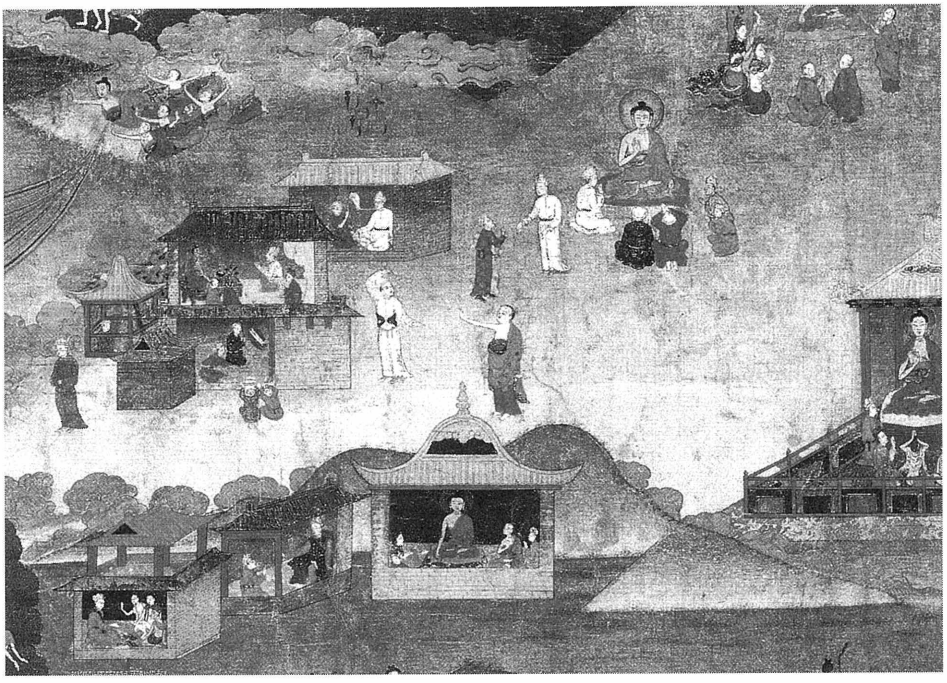

図10「シトゥのタンカ」（蔵訳第２８章から第３３章を表すタンカ）
中央上部拡大図「スダッタの物語」

図版出典

図1，2，3，7　*Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama* 前掲書

図4，5，8，9　Sharada Rani, *Buddhist tales of Kashmir in Tibetan Woodcuts: Narthang series of the woodcuts of Kṣemendra's Avadāna-kalpalatā*（New Delhi: Interntaional Academy of Indian Culture: Aditya Prakashan, 2005）に所収される線描図を筆者が加工した。

図6　田中前掲書

図10　Marylin M. Rhie and Robert A. F. Thurman, *Worlds of Transformation: Tibetan Art of Wisdom and Compassion*,（New York: Tibet House in association with the Shelley and Donald Rubin Foundation, 1999）: 148.　表1中 **WT.**

本研究はJSPS科研費基盤研究（C）「『アヴァダーナ・カルパラター』を中心とした仏教信仰の諸相」（平成26-28年度、課題番号：26370058,　代表：引田弘道）の成果の一部です。